

ハリマ共和物産

「第64回第一線会」を開催

兵庫を拠点とする卸物流会社のハリマ共和物産は6月5日、本社で第64回目となる決算報告会「第一線会」を開催し、取引企業の関係者ら約300人が出席した。

2015年3月期の連結業績は、売上高が前年比1・2%減の390億8500万円、営業利益が16・2%減の10億7300万円、経常利益が10・2%減の15億2300万円、純利益が15・3%減の8億4600万円、前年の消費増税による駆け込み需要の影響を大きく受けた減収減益となり、6年連続の売上高更新とはならなかった。また、売上高経常利益率は3・9%で前年比0・3P減となった。



64回 第一線会
業績について説明する津田社長

「当社は地方卸であり、メガ卸と同じ戦略ではなく、でもではないが生き残れ、必要な影響を大きく受けない。そこで、私たちはただ単に売上高を上げるだけではなく、卸本来の機能を磨いていく。それがリテールサポートと物流掘を当社の各子会社で取り組んでシナジー効果を

上げるとともに、メガ卸と競合する部分ではコストダウンを図って利益率を上げる(津田隆雄社長) このうえで同社では、ホールセール事業部、サポートパーティロジスティクス事業部、子会社のブルーム、地域貢献・スポーツ振興において重点目標を掲げ取り組んでいる。

まず、ホールセール事業部では、同業他社とのネットワーク強化を図る。その背景には、ここ数年ドラッグストアを中心に活発化しているM&Aの影響で、地方小売店の吸収・併合が続いていることがある。

同社の主要取引先である地方小売店が、M&Aで最悪の場合なくなることもあり、地方卸としてと厳しい状況にあるという。これは同業他社も同様のことと言えるため、地方卸同士が持つネットワークを活かし、小売業の再編に対応していく。

また、通販市場の成長が続いている状況を受け、ネット販売向けの機能も強化していく。これらに加え、地元大学とのインターン企画なども行う。

次に、サポートパーティロジスティクス事業については、物量の増加と生産性向上のため、物流センターへの投資を強化する。現在、パート従業員が商品のピッキング作業を行っているが、マンパワーが足りなくなってきたおり、一部作業の機械化などによって対応するとしている。

配送を行うブルームについては、ドライバーの増員と機能強化に向けてシステム構築を推進する。今年は名古屋事業所を開設予定で、そこでの雇用促進も図る。

続いて感謝状贈呈が行われ、同社の業績に貢献したメーカー各社の表彰を行ったほか、毎年恒例の若手社員による「決意表明」で第一部は終了した。第二部では古文講師・文筆家で、学研教育出版特別顧問の荻野文字子氏を講師に招き、「人を動かす技術」をテーマに講演会が行われた。

今回の「第一線会」は、2016年6月3日予定している。

フマキラー

プレスセミナーで感染症と危険害虫対策を啓蒙

フマキラーは6月16日、専門家を招き、感染症と危険害虫に関するプレスセミナーを開催した。同セミナーは、感染症や外来生物に関する正しい知識と対策に関する情報発信を通じて人々の命と生活を守るための警笛を打ち鳴らすことを目的に開催され、冒頭の挨拶で「今年を感染症対策元年として取り組んでいく」(佐藤猛マーカーティング部部长)という方針が示された。



小林氏

昨年、69年ぶりに感染例がみつかったデング熱を懸念する声は多い。小林睦生国立感染症研究所医科学昆虫部名誉所員によると、デング熱を媒介するヒトスジシマカは主に昼間と20～21時にかけて吸血活動をし、メスは一度に80～100個の卵を産むという。

「この蚊は平均気温が11℃以上の地域に生息する。発症後1～1・5日でウイルスが血液に出現し、発症前後の患者を刺すと感染蚊となる。ウイルスは蚊の中腸で増殖し、体液ののって全身に広がる」(小林氏)

ヒトスジシマカの発生源は雨水マスや墓石の花立て、ビニールテント、植木鉢の皿、発泡スチロールの箱などがあげられ、成虫は住宅に隣接した木陰、灌木、植生によくみられる。

「昨年、都内の公園で点的的にデング熱患者が発生したが、蚊が2～3km飛翔するのは不可能で、感染者が移動して別の公園で蚊にさされた可能性が高い。雨水マス対策や、患者が散発した場合はの対応策などを事前に決めなくてはならない」(小林氏)

マダニ類が媒介する感染症、SFTS(重症熱性血小板減少症候群)と日本紅斑熱も深刻な問題である。昨年は国内で61人の発生が確認されている。日本紅斑熱の病原体、リケッチアは細菌の仲間であり、それを保有するダニに咬まれると感染し、動物の細胞内で増殖する。SFTSウイルスやリケッチアはメス、幼虫へと受け継がれる。

「皮膚に口器を差し込み、固着物質注入と吸血の過程でウイルスを媒介する。吸着したマダニはそのまま引っ張ると口器がちぎれて残ってしまうので、皮膚すれすれの部分をピンセットで挟んでそっと抜く。早期発見、早期除去が重要だ。ダニが侵入しにくい服装や、有効成分であるディート配合率が10～12%と、高濃度な虫よけスプレーが効果的である」(島津幸枝広島県総合技術研究所保健環境センター保健研究部副主任研究員)

国立環境研究所生物・生態系環境研究センターの五箇公一主任研究員は加速する外来生物のリスクについて講演した。

「アルゼンチンアリは1993年、フマキラーの研究員が広島で確認して以来、内陸にも広がっている。労働と餌をシェアするスーパーコロニーを形成し、高い増殖力を持つ。国立環境研究所でベイト剤による防除実験を行ったところ、根絶に成功した。この成果をもとに防除マニュアルを作成し、全国の防除事業への運用を開始した」

南米原産で侵入が警戒される蟻舞(アリ)、2013年に対馬に侵入したツマアカスズメバチ、神経毒を持つセアカゴケグモなども外来生物である。五箇氏はさらに寄生生物のリスクについて触れ、「ホスト(宿主)となる野生生物の生息地の破壊と生物移送がホストと寄生生物の共進化を崩壊させ、病原体微生物が新たなすみかを求めてホストスイッチをくり返している」と、近年の新興感染症の感染爆発の背景に生物多様性の崩壊があることを示唆した。